

## 毛沢東の思想と一九四九年の中国

近藤邦康

一九四九年中国革命の勝利と中華人民共和国建国は、巨大な歴史的意義を有する。それは革命の到達点であり、また、建設の出発点であった。毛沢東は、一方で革命の勝利を祝って、「これは人民の勝利だ」と言い、他方で建設の巨大な困難を指摘して、「これまでの活動は、万里の長征の第一歩を踏み出したようなものにすぎない」、「経済建設という重大な任務が、われわれの目の前に横たわっている」（『人民民主独裁』、一九四九年六月三〇日。『毛沢東選集』四巻一四八〇頁）、と述べた。

私は、著書『毛沢東の思想』を執筆するなかで、中国人民は革命の勝利の基礎の上に建設を進めたが、それは決して追風に帆を上げて順調に運んだのではなく、不断に新しい問題や矛盾にぶつかり、悪戦苦闘して、成果も挙げ損失も出した、毛沢東の思想はその過程を反映している、と感ずる。毛沢東の思想を、革命と建設を貫く一つのものとして把握したい、言いかえれば、この二段階において、どこが変化しなかったのか、どこが変化したのか、を考察したいと思う。その作業をつうじて、「一九四九年の中国」の歴史的意義を考える。

第二次世界大戦後の日本の中国思想史研究に、次のような一つ思想傾向が存在した。

「日本の侵略、敗戦と中国の抵抗、革命」という歴史を直視して、文化の面で両国の近代化の意味を深く掘り下げ、

中国近代を鏡として日本近代を自己批評する。政治の面で米国と日本政府の中国敵視政策と中国包囲網に反対して、日中両国の友好関係の樹立を要求する。

たとえば、毛沢東研究において、竹内好（一九一〇—一九七七）は、毛沢東の思想の核心を「抵抗」の思想と見た。中国の近代を、西洋の自己拡張・侵入に対する抵抗ととらえ、魯迅の文学と毛沢東の根拠地をその代表と見た。竹内は、根拠地を、「自らのエネルギーによって自生」し、「他の力に依存」せず、支配されず奪いえない独立の存在である、と規定した。根拠地の「最小の単位が個人であり」、「革命に根拠地が必要なように、個人にも根拠地がなければならぬ」と言っている。これを「人格の独立」と結びつけた。また、「もし根拠地が最大になれば、敵の戦力は最小になるから、武力闘争は消滅する」、それ故、「毛沢東はいちじるしく平和革命に近づいている」、と言った。これは、中国革命（根拠地、武装闘争）と日本戦後民主主義（人格独立、平和革命）との間に思想上の橋をかけようとする試みであった（『毛沢東』、一九五一年、等。『竹内好全集』第四巻、第五巻）。

西順蔵（一九一四—一九八四）は、毛沢東の思想の核心を「人民」原理と「実践」の立場と見た。中国近代を、西洋近代の侵略に抵抗しつつ、最底部である農村が自己変革して自らの受動性を能動性に転化し、西洋近代の侵略と中国の旧体制を打破した過程、と見た。この過程において、旧中国の総体的「人倫」原理と「行」の立場が、西洋近代の個人的「人格」原理と「知」の立場に抵抗しつつ自己を転倒して、人民が総体的抵抗運動の中で個人的主体となり主観能動性を発揮するよう（「能動的な人格の集団となる」よう）啓発する毛沢東哲学を生み出した、と考えた（『中国の「実践論」「矛盾論」について』、一九五三年、等。『西順蔵著作集』第一巻—第三巻）。中国革命の「思想の実践的性格」に着目して、これを日本知識人の自己批評の問題として受けとめた。

私は、竹内好と西順蔵は毛沢東の思想を非常に深くとらえており、今日でも大いに学ぶべきだと思う。一方で彼ら二

人の基本的観点を反芻するとともに、他方で彼らが提起しなかった、あるいは、彼らが活躍した時期以後に発生した、いくつかの重要な問題を考察したい。たとえば、毛沢東が社会主義建設において成功した一面と失敗した一面、毛の思想の革命と建設の二段階で変化しなかったものと変化したもの、一九七八年末中国共産党が方針を転換し改革・開放政策を採用した後の、中国人の毛沢東時代に対する反省・思考、等の問題である。

以下、「人民」理想主義（主体の形成。戦略上は一を以て十に当たる）と「実際」現実主義（課題の認識。戦術上は十を以て一に当たる）の分析枠組を用いて、毛沢東の思想の三つの問題を解明する。

第一は、毛沢東の思想が中国近代思想史上でいかなる地位を占めるか、毛は早期思想においていかにして「人民」理想主義を確立したか、という問題である。

私は、中国近代を、一八四〇年アヘン戦争から一九四九年中華人民共和国建国に至る時期、中国が西洋近代資本主義世界にひきずりこまれて滅亡の危機にさらされ、外の侵略と内の専制に抗して悪戦苦闘し、ついにこれを打ち破った過程、と見る。中国近代思想史において、課題の認識（「救亡」。国家・民族を滅亡から救う）と主体の形成（「民主」。君主の統治の客体であった人民を革命の主体に変える）が連続し、主体が課題を解決する方法を模索して、「ピョートルの改革、明治維新」（戊戌変法）から「アメリカ独立、フランス革命」（辛亥革命）へ、さらに「ロシア人の道を歩む」（五四運動。中国共産党）へ、と変化したと考える。毛沢東は中国近代の「救亡——民主」の枠組を受け継いで、課題を反帝国主義・反封建主義・反官僚資本主義と把握し、主体を「民衆→国民→農民→民族→人民」と発展させ、「マルクス主義の中国化」の方法を用いて、「救亡」の課題を解決した、世界の反帝国主義民族解放運動の一部として中国革命を勝利に導いた、と思う。

毛沢東の師楊昌濟は湖南で戊戌変法運動に参加し、政変後日本とイギリスに留学して教育学と哲学を学び、帰国後辛亥革命を高く評価し、「人格独立——中等社会（＝「市民」）形成——国家独立」を主張し、五四新文化運動に期待をかけた。

毛沢東は湖南第一師範で楊昌濟から哲学を学び、先ず国家への関心（政治革命。「盛世危言」＝洋務から『新民叢報』＝変法へ、さらに『民立報』＝革命へ、と思想が変化した後、辛亥革命の実践に身を投じた）を、いったん自我の内面に収斂させて（文化革命）、さらにそれを社会の改造に拡大した（社会革命）、と考えられる。

五四運動時期、毛沢東は、自我について、楊昌濟の「吾を主とする」「公共心のある個人主義」を「精神の個人主義」（「利己」＝「自己実現」、充分に自己の身体及び精神の諸能力を發展せしめ、最高に至らしめる）ことを「人類の目的」とし、「利他」＝「身を捨てて人を救う」ことを手段として「利己」のなかに包括する）に發展させて、これを抑圧する三綱と教会、資本家、君主、国家に反対した。人民について、楊の「民を主とする」を継承し、クロボトキンを吸収して、「民衆の大連合」を提唱し、多数の民衆の大連合の力量が最強であり、必ず強権者から知識と金銭と武力を奪還して、少数の強権者の支配を打倒し、「光明世界」「黄金世界」を実現する、と主張した。李大釗は、「タテの組織からヨコの組織へ」や「精神解放」で、政治、経済、社会、家族を貫いて個性を束縛し人と人を分断する儒教上下秩序を、束縛され分断されて苦痛を感じる一人一人が自ら打破して、「個性自由、共性互助」の「大同」世界を実現せよ、と主張した。毛の「精神の個人主義」と「民衆の大連合」は、李の「個性自由、共性互助」と共通の構造を持つ。毛沢東はここで、多数民衆は必ず少数強権者に勝利する、人は必ず圧迫に反抗する、という「人民」理想主義を確立し、敵に抵抗する主体＝民衆を定立したのである。

毛沢東は、方法について、楊昌濟の「下から変ずる」（下位に居る知識人が、民衆を教育し、社会を改良し、国力を

充実させる)を継承して、新民学会を組織し、五四運動、驅張(軍閥張繼堯を驅逐する)運動、湖南自治運動を推進した。中国政治は「上が実で下は虚」であるから、上から下へ、「政治組織によって社会組織を改良」するレーニンの道を歩むことはできない、下から上へ、国民の自覚を起点として社会を改良し、国家独立を実現する(先に社会組織を建設し後に政治組織を建設する)楊昌済の道を歩むべきだと考えた。大衆運動の経験と、蔡和森の啓発(共産党を組織し、「階級戦争」を行ない、プロレタリア独裁を樹立し、社会経済制度を改造する)により、「中国と世界を改造する」方法として「激烈な方法の共産主義」(レーニンの主義)を選択した。

私は、楊昌済の影響を深く受けた毛沢東の早期思想は五四新思想は非常に重要であり、マルクスレーニン主義を受容した後も消滅せず、底流として持続して革命主体の形成に積極的役割を果たしたと考える。

毛沢東は、革命主体は多数民衆の具体的な階層を求めて、先ず労働運動に従事し、次に国民革命に参加して商人に期待をかけ、ついに湖南農民運動の巨大な力量を発見した。農民運動は必ず帝国主義・軍閥の統治の基盤である地主階級の統治を打倒することができる、農民こそ中国革命の原動力である、と確信した。奴隸は農民(とくにその大多数を占める貧農・雇農)が、仇敵は地主の権力を打倒するとともに、その権威に打撃を与えて彼らの体面を地に落とし、政権を転覆するとともに族権・神権・夫権を動揺させて、身心両面の束縛を打破して自分で自分を解放し、人と人が団結して農民協会を組織し、農民武装を創出し、自分たちで規律を打ち立てマージャンやばくちやアヘン等悪い習慣を厳禁して、経済建設、文化建設を推進している情況に目を見張り、断乎として農民運動を支持した。

五四運動における李大釗や毛沢東など都市の知識人の文化革命・社会革命の思想が、湖南農民運動で農村に入って農民の社会革命・文化革命の運動に具体化した、それがソビエト革命で中国労働農民紅軍兵士に封建専制主義を打破させ、平等と自由と「精神解放」を得させて、革命主体に自己形成させたと思われる。

楊昌濟の「吾を主とする」を継承した毛沢東の「精神の個人主義」が、「主観能動性」(一九三七年)に、楊の「民を主とする」を継承した「民衆の大連合」が、「大衆路線」(一九二九年)に、楊の「下から変ずる」と「激烈な方法の共產主義」(レーニン主義)との結合が、「マルクス主義の中国化」(一九三八年)に、それぞれ発展したと考えられる。

第二は、毛沢東が、ソビエト革命、抗日戦争、人民解放戦争を指導して、政治においていかにして最後の勝利をかちとつたか、思想においていかにして「人民」理想主義と「実際」現実主義を結合したか、という問題である。

毛沢東は、統一戦線、武装闘争、党建設を、中国革命の「三つの宝具」としてもっとも重視した。

武装闘争について、毛沢東は、ソビエト革命に取り組んで国民党軍と戦い、「農村が都市を包囲する」戦略戦術を編み出し、「中国革命戦争の戦略問題」(一九三六年一二月)でその経験を理論的に総括した。一方で、土地革命を実行するので農民の援助が得られ(軍民一致)、大多数が農民出身である兵士が自分自身の利益のために戦い、指揮官と兵士が政治上一致している(将兵一致)紅軍は、土地革命に反対するので農民の援助が得られず、兵士と下士官が命がけで戦わず、将校と兵士が政治上分裂している国民党軍に対して、勝利することができる、と考えた。他方で、敵の強大と私の弱小という不利な条件があるので、紅軍は急速に勝利することができず、戦略的持久戦を戦わなければならない、と見た。この両面を、「戦略上は一を以て十に当たる」、「戦術上は十を以て一に当たる」と定式化した。多数の農民階級は必ず少数の地主階級に勝利するという「人民」理想主義と、敵の強大と私の弱小という力関係を直視して、長期間抵抗して力関係を一步一步逆転して行く「実際」現実主義を結合したのである。

毛沢東は、作戦原則を、「敵を誘い込んで深く入らせる」(「誘敵深入」)、「敵が進めば我は退く。敵が留まれば我は攪乱する。敵が疲れば我は攻撃する。敵が退けば我は追撃する」(「敵進我退、敵駐我擾、敵疲我打、敵退我追」)の「十

六字訣」、「積極防衛」等に概括した。弱小な紅軍が強大な敵軍を誘い込んで根拠地に深く入らせ、人民大衆を自覚させて戦争に参加させ、敵の進攻に対する抵抗を通じて自らの潜在的力量を顕在化させる、人民の援助と紅軍の集中という有利な条件を造り出して、敵強我弱の力関係に変化を起し、敵の戦力が下降し我の戦力が上昇して、敵・我の力量が均衡した時に、我が戦略反攻に転じて、敵の一部を殲滅して、包囲攻撃を打ち破る、と主張した。これは、局部Ⅱ根拠地において「敵は劣勢、我は優勢」の状況を人工的に造り出して、「人民は必ず压迫者に勝利する」という戦略上の信条を戦術上の勝利に転化し、局部の勝利を積み重ねることによって、全局Ⅱ全国における「敵は強大、我は弱小」という現実の力関係を次第に逆転し、最後に全国勝利を得る、という作戦方針である。

毛沢東は、中国近代最大の「救亡」運動である抗日戦争において、武装闘争について、「持久戦論」（一九三八年五月）を講演して、「人民」理想主義と「実際」現実主義を見事に結合した。一方で、少数の地主の階級的压迫に対して、多数の農民とくに貧農・雇農は必ず反抗し勝利する、という農民革命の理想主義を、少数の日本支配階級が日本人民を抑圧しだまして侵略する民族的压迫に対して、多数の中華民族とくに農民は必ず自覚して抵抗し勝利する、という民族革命の理想主義に発展させて、「最後の勝利は中国のものである」と論断した（「戦術上は一を以て十に当たる」）。他方で、軍事力、経済力、政治組織力において敵は強く我は弱いという現実の力関係を直視して、全中国を大根拠地に変え無数の小根拠地を築いて人民戦争で抵抗する「持久戦」を提唱し、自らこれを模範的に実践した（「実際」現実主義。「戦術上は十を以て一に当たる」）。

毛沢東は、「戦争の偉大なる力のもっとも深く厚い根源は、民衆のなかに存在する」と言い、抗日戦争に勝利する原動力を、「全中国人民を動員して、その抗日の自覚的能動性（主観能動性）を全部發揮させ」ることに求めた。これは、中国人民一人一人が最後の勝利をかちとるといふ信念を抱き、持久戦の方法を受け入れて、自分が参加する局部の戦闘

の敵我矛盾を正確に認識し、正確な思想を正確な行動に移して、局部の勝利をかちとることを意味する。

統一戦線について、毛沢東は、「擁蔣抗日」（蔣介石を擁護して抗日する）を堅持しつつ、「鬪争によって団結を求め」た。全民族抗戦のなかで、共産党・軍・根拠地の独立自主を「中心支柱」として、各党各派各界各軍の自立・聯合を擁護し促進し、下からの人民民主によって蔣介石に圧力をかけつつ蔣の上からの国家統一を支え、国共合作を最後まで維持して分裂させなかった。このことが中国の抗日戦争勝利の主要な原因の一つだと思われる。また、国民党に対して、抗日戦争において第一党、主力軍、実力指導の責任を負うよう要求しながら、共産党が第二党、遊撃支隊、政治指導の任務を担って、自らの政権と軍隊を維持したまま、どちらが日本とよく戦うかを競争して、じりじりと大衆の支持を獲得して自らの実力を拡大した。①「戦略的防御」、②「戦略的対峙」、③「戦略的反攻」、の持久戦の三段階に照応する統一戦線論が、①「新段階論」（一九三八年）、②「新民主主義論」（一九四〇年）、③「連合政府論」（一九四五年）、であり、そのなかで抗日戦争の指導者を、①国民党及び共産党、②国民党あるいは共産党、③国民党か共産党か、とする思想の発展があったと考えられる。

毛沢東は、「新民主主義論」では、「今日においては、人民を指導して日本帝国主義を駆逐することができ、かつ民主政治を実施することができる者こそ、人民の救い星である。中国ブルジョア階級がもしこの責任を果たすことができるならば、だれでも彼らに敬服せざるをえない。しかし、もしもそれができなければ、その責任は主としてプロレタリア階級の肩にかからざるをえない」と言った。これは、国民党に対して第一党、主力軍として抗日戦争を指導する役割を果たせと要求しながら、もしも国民党の大部分が投降したならば、第二党、遊撃支隊である共産党が国民党に代って抗戦の指導を引き受けるという決意を表明したと読むことができる。当面の彼の強大と我の弱小の力関係を直視して、これを大衆の支持と實際を正確に認識する能力によって一步一步逆転して行くという「實際」現実主義と、将来必ずこの

力関係を逆転して自らが中国革命を指導することができるという「人民」理想主義とを結合した、柔軟かつ強靱な姿勢である。この姿勢が戦後の国共内戦に勝利する基礎を築いたと考えられる。

党建設について、毛沢東は、一九三六年から一九三七年にかけてシロコフ等著『弁証法唯物論教程』（以下『シロコフ本』と略称）などソ連の哲学教科書を集中的に研究し、ソ連哲学の概念と論理を用いて自らの革命実践を概括して、自分の思想を「哲学におけるレーニンの段階」に高めることに全力を挙げた。「実践論」、「矛盾統一法則」を講演し、著書『弁証唯物論』に収録した。同書の「第一章 一一 実践論」が建国後出版された『毛沢東選集』第一巻の「実践論」の原型であろう。

「中国革命戦争の戦略問題」の「第一章 四 重要な問題はよく学ぶことにある」に言う、「客観実際」すなわち「敵と我の両方面」が「研究する対象」であり、「ただわれわれの頭脳（思想）だけが、研究する主体である」、という思想が「実践論」に発展したと思われる。そこには次の三段の論理が含まれている。

1. 客観実際⇨敵我矛盾のなかの一方面であり身体的存在である実践主体⇨我が、敵我矛盾を解決しようとして革命実践に参加する。

2. 身体の一部である頭脳⇨主観⇨認識主体が客観実際⇨敵我矛盾を認識の対象として主（観）客（観）矛盾を構成し、主観と客観の符合を求めて、偵察・思索・判断の認識過程を進み、法則を把握する。

3. 実践主体⇨我が把握した法則を行動に応用し、認識に基づいて定めた決心・計画を実行して、革命実践により認識を検証し、敵に勝利して敵我矛盾を解決する。

「実践論」はこれを基礎として、実践から認識が発生し、感性的認識から能動的に理性的認識に発展し、理性的認識からまた能動的に革命実践に回帰し、主観世界と客観世界を改造する、と主張した。

『シロコフ本』は、マルクス・レーニン主義理論が真理であることが、プロレタリアートとブルジョアジーの階級闘争の歴史とプロレタリア革命（ロシア革命）によって、すでに証明された、ということを経験した。毛沢東は一方でこの論旨を受け入れながら、他方で「マルクス・レーニン主義も経済がおくれた植民地に生まれることはできない」と言い、むしろ、半植民地・半封建社会中国の全局の革命理論を、中国の革命指導者と参加者一人一人が自らの局部の革命実践を通じて、これから認識する道を切り開くことに、重点を置いた。また、『シロコフ本』は、認識主体は社会から遊離した個人ではなく、社会的人間、社会的階級である、ということを経験した。しかし、「実践論」は、一方で実践・認識の主体を階級、政党、人民などの集団としたが、他方で、集団の一人一人が、自ら分担する局部の矛盾を解決する実践・認識の主体となるよう教示した。ここに毛沢東の獨創性が現われている。

『弁証唯物論』の「第三章 一 矛盾統一法則」が『毛沢東選集』第一巻の「矛盾論」の原型であろう。毛沢東は、矛盾の普遍性Ⅱ共性と特殊性Ⅱ個性との関係について、共性の絶対性を前提としながら、「共性は個性のなかに包含され、個性は一切の個性のなかに表現される」と個性を非常に強調した。これは、「実践論」と同様に、中華民族に中国の民族革命・人民戦争の法則を認識する方法を教示したと考えられる。

毛沢東は、『シロコフ本』の「主要矛盾」の概念を吸収し、「次要矛盾」（第二に重要な矛盾。「副次的な矛盾」という新しい概念を付け加えて、主要矛盾と次要矛盾の相互転化の理論を形成した。これによって、中国と日本の矛盾が主要矛盾に上がり、国内矛盾が次要矛盾に下った、という状況判断と、抗日民族統一戦線結成の必要性和可能性を、理論的に裏付けた。また、『シロコフ本』の「矛盾の主要方面」の概念を吸収し、「次要方面」（副次的な側面）という新しい概念を付け加えて、矛盾の主要方面と次要方面の相互転化の理論を形成した。これによって、帝国主義が主要方面・優勢から打倒される地位に転化し、中国が「被圧迫の地位から自由独立の地位に転化する」民族戦争の法則と、農

民が被支配者から支配者に転化し、地主が支配者から被支配者に転化する民主革命の法則を把握した。それとともに、革命の主導権について、プロレタリア階級が自覚の程度と革命の徹底性の優位を活用し、農民や小ブルジョア階級と団結すれば、ブルジョア階級の政治上経済上の主導地位を奪取することができる、という統一戦線の法則を解明した。

毛沢東が説いた「宇宙の矛盾——人の実践」の革命哲学は、その著作のなかに貫徹して、多数民衆は必ず少数強権者に勝利する、という「人民」理想主義と、敵強我弱の力関係を直視してこれを敵弱我強に逆転する方法を発見する「実際」現実主義に、理論的基礎を与えた。また、「人民に奉仕する」道徳を養い、「大衆路線」（大衆の意見を集中して党の方針を定め、それを大衆に理解させ実行させる）と「实事求是」（実際の事物のなから法則を把握する）の能力を鍛錬する、党建設のなかに実現された。

毛沢東は、人民解放戦争において、「連合政府論」にもとづいて政治闘争を指導し、「持久戦論」にもとづいて武装闘争を指導した。蒋介石と双十協定を締結して、蔣の指導の下で、平和、民主、団結、統一を基礎とし、長期合作して平和建国を実現する、と共同で宣言した。一方で解放区に進攻する国民政府軍に反撃し、他方で平和、民主の回復を要求して、農村の戦争、革命の闘争と都市の平和、民主の闘争とを結合した。一九四七年七月——九月に人民解放軍が戦略的防御から戦略的進攻に転ずる転換点に到達したと判断して、「蒋介石打倒、全中国解放」のスローガンを打ち出した。同時に土地改革を実行したことにより、農民は最大限にエネルギーを発揮し、人民戦争に参加した。貧農・雇農に依拠することと中農と団結することを結合して、農民を武装闘争の主力とするともに、地主と富農の封建的、半封建的搾取制度を消滅させるが、彼らにも土地を分配して活路を与え、農村の「開明紳士」と団結し、これらの階級の出身者が多い都市の知識人と民族ブルジョア階級を、統一戦線に引き入れた。このように原則性と柔軟性を見事に結合して、ついに全国の革命勝利をかちとったのである。

第三は、毛沢東の社会主義建設の思想をどうとらえるか、革命から建設に進んで毛の思想の何が変化しなかったか、何が変化したか、という問題である。

一九四九年中華人民共和国建国以後、毛沢東は、社会主義改造と社会主義建設を指導して、成果も上げ損失も出した。「人民」理想主義と「実際」現実主義を結合するという根本的態度を失わなかったけれども、時には理想主義が突出し、独走し、現実主義が大幅に低下して、それに追いつかず、バランスを失うことがあった。ただし、困難を察知してそれを克服する過程で、次第に現実主義を回復して行ったと思われる。「三面紅旗」（三枚の赤旗。総路線、大躍進、人民公社）を例として、この問題を考察する。

初期マルクスが、資本主義に対して、内部から「プロレタリアート、自己疎外、共産主義」という「絶対批判」（人間が歴史の中で、かれの「同時代」を批判するに当たって、何らかの形でかその底においた極限的批判の根拠、その絶対仮説ともいべきもの。梅本克己『現代思想入門』）を行なったことと照応させるならば、毛沢東は、帝国主義に対して、外部から「人民、矛盾、大同」という「絶対批判」を、革命と同じく建設でも遂行したと見ることが出来る。

毛沢東は、社会主義工業化・農業集団化を実現して物質的条件を作り上げ、ドイツと日本を打ち破って第二次世界大戦を終結させた、スターリンの功績を高く評価した。毛自身も、外は東西冷戦のなかで、帝国主義の世界戦争を人民の世界革命によって阻止することをめざして、中国の人民戦争態勢を堅持しつつ、米軍と朝鮮で激戦し、ベトナムの抗仏戦争・抗米戦争を支援した。内は農業集団化を先行させて、その基礎の上に国家工業化を推進するという道を切り開いて、新民主主義から急速に社会主義に移行した。この道によって、戦争準備と対外援助を支える物質的条件を作り上げることと、独立した工業体系と国民経済体系を打ち立てることをめざした。

毛沢東は、建設を導く理論について、一方で、ソ連の国家社会主義の骨組（共産党が国家と癒着して社会を一元的に支配する、党・国家・社会団体が一体化した集権政治、国家所有・集団所有と計画経済、マルクスレーニン主義の国教化〔国家イデオロギー化〕）と、スターリン建設モデル（農業集団化により原始的蓄積を行なって高速度工業化を推進し、左右の異論を党内闘争によって処理する）を受容した。他方で、ソ連社会主義を上からの「一本足で歩く」やり方だと批判して、中国の人民戦争の方法によってソ連の枠組を運用して、上からの党・政府の指導と下からの人民の大衆運動とを結合する「二本足で歩く」やり方を創出しようとした。

毛沢東は、この「二本足で歩く」方針を、主として「十大関係論」（一九五六年）で展開した。ソ連の重工業偏重と過度の中央集権等の欠点を批判して、「一切の積極的要素を動員」する方針を実行し、「軽工業と農業をより多く発展させる方法」によって、「重工業をより多くより早く発展させる」こと、「国家と生産単位と生産者個人の三方面をもに配慮する」こと、「中央と地方の二つの積極性」を発揮させること等を主張した。これは中国独自の建設路線の構想であり、これが大躍進の思想的源泉となった。

一九五七年、一五年後ソ連は生産力で米国に追いつき追い越す、と言ったフルシチョフに呼応して、毛沢東はモスクワで、一五年後中国は粗鋼生産量でイギリスに追いつき追い越す、社会主義陣営は天下無敵となり、世界は恒久平和を獲得する、と非常に楽観した。この見通しに基づいて、大躍進運動を起こした。

主体の方面では、人民大衆は「意気天を衝く」勢いで、「前代未聞の熱意と生産意欲とをもって」、自発的に積極的に生産に励んだ。毛沢東は、これまでのどの勝利よりも愉快だと語り、大衆の意気込みを「共産主義精神」（第一に貧困、第二に文化水準が白紙状態、という不利な条件に抵抗して奮起し、自覚的・自発的に猛烈に働く。過去の奴隷の顔はなく、主人となった。「我のものは人のもの」と表現して、共産主義運動を推進して共産主義に到達することをめざした。

建設期における、人民とくに貧困農民の、世界を改造し自己を改造する主観能動性に対する、このような無限の信頼は、革命期の「人民」理想主義の継続であり、発展である。ただし、毛は自分の理想のなかの人民と実際の人民との間の距離を、十分自覚しなかったようである。

毛沢東は、人民大衆が大躍進のなかで自発的に創造した人民公社を、「政（末端行政機構）社（経済組織）合一」、「工、農、商、学、兵」結合、と定式化し、「社会主義を建設して共産主義へ移行するための、最良の組織形式」、「未来の共産主義社会の末端単位」と規定して、これに大きな期待をかけた。マルクス主義理論（生産物の豊富、人民の自覚・道徳の向上、全人民教育の普及と向上、工業と農業、都市と農村、頭脳労働と肉体労働の三大格差および「ブルジョアの権利」の漸次的消滅、对外防衛以外の国家の機能の消滅、を共産主義に移行するための五条件とした）と、二二年の革命戦争における軍事共産主義、（将校と兵士の平等、戦闘中の相互扶助、供給制、人民への奉仕など）と、農民戦争の「原始的社会主义」の伝統（無料の医療、「ただで飯が食える」義舎、「政社合一」、労働・軍事の結合など）を挙げて、人民公社に理論的基礎を与えた。早期思想において発生し、革命戦争のなかで形成された毛の共産主義思想が、ここで根こそぎ動員されて、最高潮に達したと考えられる。

方法の方面では、毛沢東・共産党は、人民大衆の空前に盛り上がった積極性を、適切に指導することができなかった。毛沢東は、人民の積極性を傷つけたとして、周恩来・陳雲らの「反冒進」（速すぎる建設速度に反対）の主張を批判して、彼らに自己批判させた。周・陳が政府の経済指導工作の実践のなかから認識し、党八回大会で承認された「総合平衡のなかで漸進的に（「穏歩」）前進する」方針を十分重視しなかった。建設の巨大な困難と主体である「毛——党——人民」の能力の不足との力関係を十分測定せず、ただ人民の生産の情熱と、共産党が人民を指導して革命戦争に勝利した自信と、社会主義制度の優越性に対する信念に頼って、粗鋼生産の前年比倍増と穀物生産の九〇%増という「高すぎ

る目標」を掲げて、大衆運動を大いにやる方法で、大躍進を強行した。革命戦争に比べると、「人民」理想主義が独走し、「実際」現実主義が低下してそれに追いつかず、バランスが崩れた、と考えられる。

しかし、毛沢東は、人民公社設立の過程で「共産風」（「人のものは我のもの」）が大いに吹き荒れたことを、真先に察知した。これは、県党委員会と公社党委員会の、「平均主義の傾向（公社内の各生産隊と各個人の収入に格差があるべきであることを否認し、貧富をならして均等に分配する傾向）」と「過度集中の傾向（生産隊の財物や蓄積や労働力を無償で徴発して、公社に集中する傾向）」などの農民を剝奪する風潮であり、また、貧農・下層中農が中農の利益をかすめとり、平均主義をやろうとする傾向である。毛は反右から反「左」に転換して、社会主義の原則（等価交換、労働に応じた分配。「我のものは我のもの」を強調し、「ブルジョアの権利」について、一部分（甚だしい等級制、幹部と大衆の不平等な関係）を破壊しなければならないが、他の一部分（賃金制、必要な格差、「多く労働した者が多く受け取る」）を保存しなければならない、と主張して、「共産風」の克服につとめた。

毛沢東は、一方で、一九五九年の粗鋼生産の目標を、三〇〇〇万トンから一三〇〇万トンに引き下げた。他方で、公社所有制の問題でもあまりにも前進しすぎた、と反省して、人民公社（のち平均約二〇〇〇戸）を、人民公社、生産大隊、生産隊の三級管理とし、生産隊（旧高級合作社。平均約二五〇戸）を基本的採算単位とした（最終的には、生産隊（旧初級合作社。平均約三〇戸）を基本的採算単位とした）。その基礎の上に、貧困な生産隊の生産を発展させて富裕な生産隊に追いつかせる、公社の蓄積を拡大して公社の工業化と農業の機械化・電氣化を実現する、国家の工業化を実現する、すなわち、人民の生活と公社の蓄積と国家の需要との三方面を全般的に配慮する、という全体の構図を描いて、はるか遠い先まで見通した。次第に「実際」現実主義を回復して、「客観的法則に合致した、実際に合致した」主観能动性を言い、「総合平衡があってはじめて、大衆路線がある」と語った。

毛沢東は、三面紅旗を堅持しつつ、「左」の欠点を克服する、という線で問題を解決しようとした。しかし、廬山会議で提出された彭徳懷の「小ブルジョア階級の熱狂」という批判に対して、広範な大衆の熱情に冷水をかける「ブルジョア階級の動揺」だと反撃して、反「左」を反右に切りかえ、反右傾運動を起こして大躍進を継続したため、またも「共産風」が吹き荒れて、農業生産と農民生活に大きな損害を与えた。一九五九年末重工業は増産したが、農業は大幅に減産し、基本建設の増加による蓄積率の上昇が人民の消費を圧迫した。農村では、穀物が減産したのに買付量を増やしたため、食糧が不足して、浮腫病や死亡が増加した。一九六〇年夏穀物が減産して、全国に未曾有の穀物不足の局面が現われた。

一九六〇年六月毛沢東は、計画目標を調整し引き下げて主導権をかちとることを提案し、周恩来がそれに賛同して穀物、綿花、養豚の目標の引き下げを提案し、劉少奇も鄧小平も周に賛成した。以後「調整、強化、充実、向上」の八字方針の形成と実施、一九六二年七千人大会における毛沢東の自己批判を経て、陳雲（のち周恩来）が国民経済回復の任務を担当した。毛沢東は調整政策を支持し続けた。三面紅旗には、そのほか、毛沢東は経済の指導が不得意であった、政策の層位の異論を思想の層位の異端と見なして、批判と自己批判の方法により抑圧した、等の問題がある。

一九六二年から一九六四年まで中国人民は自力更生により、国民経済を全面的に好転させた。この人民の活力の基礎には、一九四九年中国革命に勝利した自信があると思われる。

毛沢東は、社会主義工業化と農業集団化を実現して物質的条件を作り上げ、ドイツと日本を打ち破り第二次世界大戦を終結させた、スターリンの功績を高く評価した。毛自身も、東西冷戦のなかで、帝国主義の世界戦争を人民の世界革命によって阻止することをめざして、中国の人民戦争態勢を堅持し、朝鮮戦争に参戦し、ベトナム戦争を後方支援して、

アジア、アフリカ、ラテンアメリカの民族解放運動を支援し、中米和解とベトナム統一によりアジアにおける世界戦争の時代を終了させることに貢献した。これと並行して、農業集団化と社会主義工業化を実現して、対外援助を支え戦争に備える物質的基礎を築き、独立した工業体系と国民経済体系を打ち立てた。他方、その代価として、国内に甚大な苦難と損失をもたらしたことにおいて、中国の大躍進（一九五九年—一九六一年の三年間の不正常な死亡・出生減少が合計四〇〇〇万人）はソ連の農業集団化（一九三二年—一九三四年）に相当し、文化大革命（死者四〇万人、被害者一億人）は大粛清（一九三七年—一九三八年）に照応する。世界戦争の時代から世界経済の時代へ転換した現在、毛沢東時代の中国社会主义の積極面と消極面を直視し、深く考える必要があると思われる。

#### 付記

本稿は、一九九九年一月三〇日から二〇〇〇年一月三日まで、中華人民共和国・北京で開催された、「一九四九年の中国」国際学術討論会（中国史学会・中国社会科学院近代史研究所が主催）に提出した論文（中国語版。その一部を国際学術討論会で口頭発表。その全部を二〇〇〇年一月二八日上海社会科学院歴史研究所で口頭発表）の日本語版に、修正加筆したものである。近刊の著書『毛沢東の思想』の一部の要約でもある。